- 4 イエバエ、ヒメイエバエ兩種蛹を単独または混合個体群で供与した場合のハエヤドリコガネコバチの寄生性に関する調査 長谷川 勉¹⁾・庄野 美德²⁾・五十嵐 隆¹⁾
(¹⁾岩手大・獣医・寄生虫、²⁾住友化学・農業化学品研)
Parasitism of Pteromalid wasp *Spalangia endius* to single and mixed population of pupae of the both species *Musca domestica* and *Fannia canicularis* under laboratory conditions.
T.Hasegawa, Y.Shono & T.Igarashi.

兩種蛹の単独個体群供与試験では蛹化直後の蛹を90ccカップに30個体ずつ入れ、それに羽化直後の寄生蜂1♀を放し、24時間後回収してその後のハエと寄生蜂の羽化状況を調査した。混合個体群供与試験では200ccカップに兩種とも蛹化直後の蛹30個体ずつ計60個体を入れ、寄生蜂2♀を放し、その後は単独の場合同様の処理、調査を行なった。両試験とも寄生蜂無放飼の対照区も設けた。試験の結果、イエバエとヒメイエバエ蛹に対する寄生蜂の寄生や吸汁(host feeding)によると判断された羽化阻害率はそれぞれ単独供与で約70%と約90%、混合供与で約53%と約80%であり、いずれにしてもヒメイエバエでの場合がイエバエでの場合より高く、供試したハエ兩種蛹に関してはハエヤドリコガネコバチの寄生嗜好度はヒメイエバエに対しての方がイエバエに対してより高いことが分かった。なお、兩種のハエ蛹からの寄生蜂羽化経過(産卵～羽化までの日数)には殆ど相違が認められなかった。

- 6 ニホンジカを吸血するカ類 ○山下伸夫(東北農試家畜虫害)・佐々木均(酪農大応用昆虫): N. Yamashita & H. Sasaki: Mosquitoes blood-sucking from Japanese deer.

アカバネ病は昆虫媒介による家畜の重要疾病とされているが、ベクターは依然不明のままである。ワクチン接種により近年は本病の家畜での流行は無いが、ニホンジカからは同ウイルスに対する抗体陽性反応が高率で検出されており、シカが同ウイルスのレゼルボアである可能性が示唆されている。そこでシカを吸血するカ類を調べた。カ類は東北農試場内(盛岡市)の綿羊・ニホンシカ飼育舎にBLBライトトラップを1994年7月5日より同年9月8日まで設置し捕獲した。捕獲されたのは個体数の多い順から、シナハマダラカ、アカイエカ、コガタイエカ、ヤマトヤブカ、オオクロヤブカ、ハマダライエカ等8種であった。吸血個体について、ELISA法を用いその吸血源を調べたところ、シナハマダラカ、アカイエカ、コガタイエカ、オオクロヤブカがシカより吸血したことが明らかになった。

- 5 コウリヤンコバネナガカメムシの家屋侵入被害例 ○伊東拓也・高橋健一(北海道衛研)・佐藤徹(江差保健所) On *Dimorphopterus spinolae*, a trespasser on the human premises (Lygaeidae, Hemiptera).
Takuya Ito, Kenichi Takahashi and Toru Sato

1995年5月、北海道釧路管内上ノ国町において、コウリヤンコバネナガカメムシ *Dimorphopterus spinolae* が、住居外壁、周囲、および、住居内に多数侵入する被害が発生した。被害は、海岸沿いに並列する住宅およそ200mの範囲に及んだ。5月および8月に調査を行った結果、発生源は海側に隣接した砂地であった。8月には、多数の幼虫と成虫が、イネ科のテンキグサ(ハマニンニク) *Elymus mollis* の葉と茎との間に形成された隙間から得られた。その最大密度は、幼・成虫あわせて、一茎当たり230個体に達し、本虫の吸汁により黄変したと思われる葉が目立った。他の植物からは、カヤツリグサ科コウボウムギ *Carex kobomugi* に少数が見いだされた以外、得られなかった。本カメムシは日本未記録種で、国外では、欧州から中国まで広く分布し、コウリヤンやコムギなどの害虫として知られる。また本種成虫には、長翅型と短翅型があるが、今回は、飛翔不能な短翅型のみが得られた。同様の被害は、同年同月に胆振管内登別市でも報告された。

- 7 ビデオ監視装置を用いた養豚場へのキタキツネ接近状況調査 浦口宏二・高橋健一(道立衛研医動物) Analysis on the mode of visits of foxes to a pig farm
Kohji Uruguchi and Kenichi Takahashi

多包虫に感染した豚が発見されている養豚場の糞尿捨て場(堆肥場)に、長時間録画可能なビデオ監視装置を設置して、1994年5～6月と7～9月にキタキツネの接近状況を調査した。

5～6月の調査の結果、311回の接近が録画され、そのうちの約8割で餌を探索する行動が見られた。摂食行動は堆肥場に胎盤が廃棄された日に限って起こり、その際の滞在時間は堆肥場を通過するだけのときや探索行動だけのときに比べ長くなった。胎盤が廃棄された日と廃棄されなかった日を比較すると、接近回数に大きな差はなかったが、堆肥場での1日の滞在時間は、胎盤が廃棄された日の方が約3倍長くなった。

次に7～9月の調査で、実験的に1カ月間胎盤を廃棄しないようにして、その後の状態と比較したが、接近回数に大きな変化は見られなかった。